

大学キャンパス内における新入生の居場所に関する縦断的研究

学校教育学専攻
学校心理学コース
M09034G
清島 純江

【問題・目的】

大学新入生は、新環境における危機的状況の中で適所や自分の心の拠り所、活動拠点となる「居場所」をいかに見つけていくかが重要な課題となる。居場所とは、物理的空間とそこでの心理状態を含んだものである(吉岡・高橋,2010)といえる。そのため、新入生が大学キャンパス内で居場所と捉える場所がどのような性質の場所なのかを探る必要がある。そこで、本研究では、居場所の心理的機能という概念を用いることとする。本研究で調べようとする居場所としては、杉本・庄司(2006)を参考に、特にいたいと感じられる居心地の良い場所であり、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」といった多様な心理的機能を有する場所と定義する。大久保・青柳(2005)の研究から、新環境移行の過程で、居場所の心理的機能のうち、他者との関係に関する機能が高まっていくと考えられる。また、中村(1998)等の研究から、居場所と対人関係の形成には関連があると考えられ、杉本・庄司(2006)の研究から、大学内で友人と関わりを持っている者は関わりを持っていない者よりも「被受容感」や「自己肯定感」の得点が高いと思われる。

本研究は、大学新入生を対象に、大学キャンパス内における居場所及び居場所の心理的機能の変化、居場所と対人関係の形成との関連を明らかにしていくことを目的とする縦断的研究であり、以下の仮説を検討していくこととする。

(1) 入学後、時間経過に伴い、居場所は変化し多様化するだろう。

(2) 入学後、時間経過に伴い、他者と関係する居場所の心理的機能は高くなるだろう。また、それは、男子よりも女子の方が高い得点を示すだろう。

(3) 新環境での対人関係を形成している者は、形成していない者に比べて「被受容感」や「自己肯定感」のような居場所の心理的機能得点が高いだろう。

(4) 入学後、時間経過に伴い、PDM 上に表れる新環境の人物は、その人の居場所に関係している人物だろう。

【方法】3回の調査を行った。

調査対象者：近畿地方の A 教育大学の新入生
177名

1回目 177名(男子 57名, 女子 120名)

2回目 164名(男子 52名, 女子 112名)

3回目 156名(男子 49名, 女子 107名)

調査内容：

- ① 居場所の自由記述(上位 5 つまで)
- ② 大学キャンパス内の最上位の居場所
- ③ 居場所の心理的機能尺度：杉本・庄司(2006)。
- ④ 心理的距離地図(PDM)：Wapner(1978)。

調査日：

第 1 回：2010 年 4 月 12 日

第 2 回：2010 年 5 月 6 日

第 3 回：2010 年 7 月 15 日

入学式は、2010 年 4 月 6 日であった。

【結果と考察】

1. 大学新入生の「居場所」

4 月には多くの者が食堂を選択したが、5 月になると食堂から分散して様々な場所が選ばれるようになったため 5 月において仮説 1 が支持された。7

月には部活・諸活動を行う場所に集束していく様子が明らかとなった。

2. 居場所の心理的機能

居場所の心理的機能の変化を検討するために、性×時期の2要因分散分析を行った。時期の主効果が有意であった「充足感」は4月よりも5月において、「被受容感」は5月よりも7月において、また、交互作用が有意であった「自己有能感」について、女子において4月よりも5月と7月に高くなった。「時間経過に伴って、他者と関係する心理的機能の得点が高くなるだろう」とした仮説2は支持された。さらに、自分ひとりの場所で得られる機能である「ありのままの自分」と「思考・内省」について交互作用がみられ、女子において4月よりも5月と7月に高くなった。これは仮説2で挙げた以外の居場所についての心理的機能も高まることを示しており、あらゆる心理的機能は入学後に高まる可言えよう。また、性差に関する仮説2は支持されなかった。

大学内の「居場所」(食堂,図書館,部活・諸活動を行う場所,教室,コンビニ,ピアノ練習室)の違いによって、居場所の心理的機能が異なるかどうかを検討するために1要因分散分析を行った(男子の人数が不十分だったため性差は検討しなかった)。3時期ともに「ありのままの自分」と「思考・内省」は図書館が、「自己有能感」は部活・諸活動を行う場所が、「被受容感」は食堂と部活・諸活動を行う場所、教室が他の場所よりも高い得点を示した。

3. 対人関係の様態と居場所の心理的機能の関係

対人関係の様態の違いによって、大学キャンパス内の居場所の心理的機能得点に差があるかどうかを検討するため、群(3)×時期(3)の2要因分散分析を行った。旧重視群よりも「自己有能感」では新重視群が、「被受容感」では積極的群と新重視群の得点が高かった。「新環境での対人関係を形成している者ほど「被受容感」や「自己肯定感」の得点が高

いだろう」という仮説3は支持された。

心理的距離の近い人物がその人の居場所に関する人物かどうかを検討した結果、家族は自分の居場所と関係なく心理的距離が近い存在であること、旧友人・旧先生は居場所に関係のある人は心理的に距離が近い存在のままであること、新友人は居場所と関係のある人が増えていくことが明らかとなった。したがって、仮説4は支持された。

【総合考察】

大学内の「居場所」の違いによって求める心理的機能が異なった。「自己有能感」は部活・諸活動を行う場所において、「被受容感」は食堂と部活・諸活動を行う場所において有意に高かった。入学後は、食堂を居場所とした者が多く、時間経過に伴って部活・諸活動を居場所とした者が増えたことから、居場所として確立する場所とは、被受容感を感じられる場所から被受容感とともに自己有能感を感じられる場所が変わっていくことが考えられる。

積極的群は、全体得点についても旧重視群に比べて高い得点を示した。住田(2003)は、自己概念を再確認できるように、多くの他者に受容され、承認され、肯定されているのだという確証が自己に自信と安定をもたらすと述べている。したがって、大学新入生は、新旧環境にかかわらず、多くの人に支えられている者ほど、安定した自己概念を形成しており、新環境での居場所の心理的機能得点も高くなると思われる。

心理的距離の近い人物がその人の居場所に関する人物かどうかを検討した結果、新環境における対人関係とその人の居場所や居場所の心理的機能には関連があった。新入生は、授業や学内での活動等を通して、大学内での友人関係を形成したり、自己の能力を発揮する場を見つけていくことが重要だろう。

主任指導教員 小林小夜子
指導教員 古川雅文